

無意識に蟻を踏んでいた女の子に頼
み込んで足と靴の匂いを嗅がせても
らった話



第一章　—画面越しの衝撃—

薄暗い部屋に、キーボードを打つ軽い音だけが響いていた。

自宅でフリーランスとして仕事をしている中谷 奏太（なかに そうた）(24)は、動画編集の仕事の手を止め、疲れた頭を少しだけ休めようと PC ブラウザを開いた。

なんとなく開いたのは、いつもチェックしている動画投稿サイト。

踊ってみた、料理、Vlog、ASMR——再生数やサムネイルが気になるものを無意識にスクロールしていく。

ふと、目に止まった一枚のサムネイル。

「【踊ってみた】 さよなら宣言/ 踊ってみまし

た！」

投稿者名は「YUKA_結花」。

画面に写るのは、笑顔でポーズを決める奏太よりも少し年下くらいに見える可愛いらしい女の子。

ぱっと見た瞬間、「可愛い」と口に出しかけて、奏太は少し照れたように鼻をすすする。

白い肌に整った顔立ち。

長い脚がすらりと伸びていて、足先に履かれた黒いペタンコパンプスの甲には小さなリボンがついている。

(……可愛いし、ちょっと見てみるか……)

つい惹かれるように再生ボタンを押す。

ube

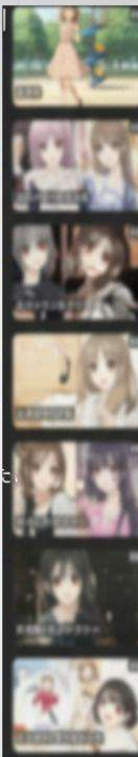
>

ンボル

種 >

ンボ >

影



【踊ってみた】さよなら宣言／踊ってみました！

YUKA_結花

3.5万回再生 2025/7/5

24 00112209



どこかの公園のような砂地の広場で、彼女は音楽に合わせて軽快にステップを踏んでいた。

真っ直ぐに伸びた脚、ふわりと揺れる花柄のワンピース、そして無邪気に笑うその表情。

画面越しにも、彼女の明るさや素直さが溢れていて——奏太は素直に思った。

（……結花ちゃんか……めちゃくちゃ可愛いな、この子……）

ただの好みか、疲れているせいかな。
そんな曖昧な動機で、しばらく無言のまま見入っていたときだった。

ふと、画面の端。彼女の足元に何か黒い粒が動いているのが視界に引っかかった。

最初はノイズかと思った。だが、目を凝らして確認してみると――

彼女がステップを踏む足元、砂地の地面のあちこちに無数の小さな黒い粒が蠢いている。

(……アリ？)

それは地面を這い回る、**蟻の群れ**だった。

地面の上をせわしなく動くその群れの中に――
――楽しそうに踊る彼女の黒いパンプス足が、何のためらいもなく、踏みおろされる。

ズツ……ジャリ……

――次の瞬間。

地面の上を歩く一匹が、パンプスのソールの下敷きになったのがはっきりと見えた。

(あ……踏まれた……)

靴底が再び地面から離れると、砂地にうっすらと残る彼女のパンプスのソール跡の上で黒い粒は動かなくなっていた。

彼女は全く気づいていない。
笑顔のまま、軽快な音楽に合わせてステップを踏む。

だが奏太の目は、いつのまにか彼女の笑顔ではなく、その足元に釘付けになっていた。

また一步。

また一匹。

彼女の女の子らしい可愛いリボン付きのペタンコパンプスを履いた足が、次々とステップを踏みながら蟻を踏み潰していく。

無意識に地面を歩く命の上に足を下ろし、滑らすように靴をズラす足の動きが妙にエロく見える。

「なにこれ……やば……」

彼女は気づいていない。

可愛い顔で、楽しそうに、無意識のまま。

その足の下で、ただそこを歩いていただけの小さな命が何のためらいもなく潰されていく。

可愛らしい見た目の少女と、足元で無惨に潰される蟻。

モニター越しのそのなんとも背徳的な映像に
気づけば奏太はどうしようもないほどに興奮
させられていた。

(……この子……無意識に……踏んでる…
…！)

呼吸が浅くなる。

画面に映る彼女のステップのたびに、奏太の心
臓がドクンと跳ねる。

「なんだよこれ……」

初めの動画を見終わるころには、奏太の体は興
奮で熱くなり、股間はパンパンに膨らんでいた。

仕事の合間に気晴らしで見た一本の動画が、奏
太の中の何かを完全に狂わせていた。

気づけば「YUKA_結花」の動画一覧から良さそうな動画を漁っていた。

(……次はこれ……)

同じ公園、同じ広場。

衣装は違う——今度は爽やかなブルーのフレアスカートに白いブラウスだ。

だが、足元だけは同じ黒いリボン付きペタンコパンプス。

白い足の甲までしっかりと見え、見た感じ靴下などは履いていないように見える。

再生ボタンを押すと、柔かい陽光の下、彼女が笑顔で踊り始める。

奏太の視線は、最初から足元だけに吸い寄せら

れていた。

(……いる……やっぱり……)

砂地の上を這い回る、無数の黒い小さな粒。
恐らく近くに巣があるのだろう。

画面越しでも分かるくらい、その数は異様だった。

(これ……ヤバい……)

気づけば奏太は、画面に顔を近づけ、齧り付くように見ていた。

結花のパンプス足がステップを踏むたび、砂地に淡い靴跡が残る。

その靴跡の上には、さっきまで蠢いていた黒い

粒が動かなくなり、点々と散らばっている。

さらに結花は、振り付けで同じ場所に何度も足を踏みおろす。

砂地に刻まれた靴底跡と、その上で潰れた黒い粒が重なり合っていく。

(……ヤバすぎる……)

奏太の胸がドクンドクンと鳴る。

もう休憩どころではない。

マウスを握る手に汗が滲んでいる。

動画の最後、音楽が終わり、結花は可愛い笑顔で決めポーズをした。

その足元には、踏み荒らされて靴跡だらけになった砂地と、靴跡の上に散らばったまま動かない黒い粒たち。

可愛い笑顔と同じ画面の中に、彼女が足で行った残酷な行為の惨状が映し出されている。

(……この子、ほんとに……無意識に……)

画面の中の可愛い女の子が行っている無意識の残酷行為。

そのギャップに、奏太は息を詰めたまま興奮を抑えきれずにいた。

一度火がついてしまった欲望は、もう止まらなかった。

奏太は次から次へと動画を再生し、結花の足元ばかりに目を凝らしていた。

違う衣装、違う楽曲。だが、足元はどの動画で

もほとんど同じ黒いリボン付きのペタンコパンプス。

そして、その足下では——

「……また踏んでる……」

彼女の動画によく出てくる公園の広場のような撮影場所。

その場所の動画のほとんどで足元をうろついている蟻たち。

そして彼女は何の悪気もないような表情で、それらが無邪気なステップで踏み潰していく。

それがあまりにも自然で、あまりにも残酷で、そして……そのギャップが奏太の興奮を誘う。

「こんな可愛いのに……蟻踏みまくって……」

ふと、新着動画の一覧をスクロールしていた奏太の視線が、あるサムネイルに止まった。
画面の端に写る、遊具の一部が目に残ったのだ。

(……ん？ この形……)

指が止まり、思わずクリック。
再生が始まり、映像が明るくなった瞬間——奏太の目が大きく見開かれた。

特徴的な形の滑り台。
横にあるブランコ。
奥に植えられた木の感じ。

「……ここって……」

間違いない。

自宅から徒歩 5 分ほどの場所にある、見覚えのある公園だった。

さらに他の動画も見直してみると、背景に写る木や柵、遊具の配置がすべてあの公園と一致する。

(……うそだろ……？ 全部……あの公園だったのか……？)

まさか彼女が蟻を踏みながら踊っていた場所が……こんな近くだったなんて。

急に心臓が早鐘を打ち始める。興奮というより、もはや高揚感に近い。

(……結花ちゃん、もしかしてこの近くに住んでるのか……?)

いても立ってもいられず、奏太は動画投稿アカウントのプロフィールに記載されていたリンクをクリックした。

飛んだ先は、彼女の SNS アカウント。

——@YUKA_結花

フォロワーは 2000 人ほど。

プロフィールには「歌とダンスが大好きな地下アイドル」「都内近郊で活動中」とある。

タイムラインには、彼女の可愛い顔の自撮り写真や、カフェで撮ったと思われる日常の投稿が並んでいた。

コメント欄には「結花ちゃん今日も可愛い！」

「またライブ行くねー！」といったファンの声が溢れている。

(……アイドル……なんだ……)

あんな無邪気な顔で笑い、蟻を踏みにじりながら踊っていた彼女が――

アイドルとして、ファンに愛され、舞台上で笑っている……。

しかもすぐ近くで活動している…。

(……ヤバイ……結花ちゃん、好きだ……！)

まるで運命のような衝撃。

頭がクラクラする。

ただの趣味の踊ってみた動画だと思っていたのに、彼女は“アイドル”という顔まで持っていた。

奏太は震える指で、動画アカウントと SNS アカウントの両方をフォローした。

(……この子……マジでヤバい……)

「……結花ちゃん……」

つぶやいた名前に、どこか熱がこもる。

奏太の中で、彼女はもう“偶然見つけた可愛い子”ではなかった。

画面越しに、距離がぐっと近づいた気がする。

そしてその瞬間、奏太はすっかり彼女の“ファ

ン”になっていた。

可愛くて無垢で、残酷で無自覚な女の子——

YUKA_結花こと水原 結花(19)との出会いをきっかけに、今後の奏太の生活が大きく変わることになるとは、この時はまだ思っていなかった。

第二章　－初めての接触－

それからというもの、奏太の生活はすっかり結花に埋め尽くされていた。

昼間は仕事の合間を縫って結花の過去動画を漁り、

夜はベッドに潜り込み、スマホの画面に映る結花の足元を食い入るように見つめながら、自分を慰める毎日。

結花が笑顔でターンを決める瞬間、地面で蠢く蟻たちが次々と靴底に押し潰され、その上で足をひねり、何も知らずに可愛いポーズを決める彼女の無防備な姿に、毎晩のように欲望を爆発させていた。

（もし……この子が、蟻を踏んでることに気づいたら……？）

（どんな顔するだろう……？ 怖がる？ 驚く？ それとも……気にしない？）

（……もしかして……最初から分かってて踏んでたら……？）

そんな妄想が膨らみすぎて、奏太の中で限界が来ていた。

あの動画を見た最初の日から、もう何十回も繰り返し再生していた。

そしてある日、ついに衝動を抑えきれず——
結花の最新動画のコメント欄に、こう書き込んでしまった。

「結花ちゃん、気づいてないかもしれないけど

踊りながら蟻たくさん踏んでるね…」

送信ボタンを押した瞬間、心臓がドクンと跳ねた。

指先が少し震えていた。
気持ち悪いと思われるかもしれない。ブロックされるかもしれない。

でも——知りたかった。
あの足元の残酷な行為の裏側で、彼女はいったい何を思いながら踊っていたのか。

そして翌日。
通知が来た。

「あなたのコメントに返信が付きました」

(……………！！)

画面を開いた瞬間、喉が鳴る。
返信者の名前を見て、背筋に震えが走った。

——「YUKA_結花」

本人からの返信だった。

恐る恐るコメントを開くと、そこには——

わっ……ほんとだ！ 🍇💧

全然気づかなかった～～～💔

アリさんごめんねえ～～ 🙏💧💧💧

ハートや汗マークのついた絵文字だらけの文章。

罪悪感は確かにあるのかもしれない。
けれど、その文面からは深刻さよりも、どちらかというところ可愛さの方が勝っていた。

（気づいてなかったのか……でも……謝り方が、可愛すぎる……）

「気づかずに踏み潰していた」
「それを知って、ゆる〜く謝っている」

奏太の脳内で、結花の「無自覚な残酷さ」がより一層色濃く焼き付けられていった。

女の子らしい可愛い絵文字を散りばめながら、
無数の命を踏み潰してきたその事実を、まるで
「うっかりジュースこぼしちゃった」みたいな
ノリで語る彼女。

(……もうダメだ……本当好きすぎる……)

画面を見つめながら、奏太の鼓動は止まらなかった。

その数時間後、スマホに通知が入った。

「YUKA_結花が新しい投稿をしました」

胸の奥がドキリとする。

すぐに SNS を開くと、そこには見慣れた可愛い絵文字が並んでいた。

「結花の動画の視聴者さんに教えてもらったんだけど、結花、ダンスしながら蟻さんいっぱい踏んじゃってたみたい🐜💧

全然気づかなかったよ～(m´・ω・`)m ゴメン
…」

「……」

奏太の心臓が、また早く打ち始める。
あのコメントが、確実に彼女に届いていた。

そして今、全国に向けて彼女自身がそれを発信
している。

さらに返信欄に目をやると、普通のコメントに
混じって奇妙に熱っぽい文面が散見された。

「結花ちゃんに踏まれるなら蟻も本望では？」

「俺も結花ちゃんに踏まれたい…」

「蟻踏みながら笑顔で踊ってる結花ちゃんに
正直興奮した…」

奏太は思わず目を細める。

自分だけじゃない——同じような衝動を持つ
者たちが、あのコメント欄に集まっていた。

(……やっぱり、いるんだ……俺と同じように
感じてる奴らが……)

すると結花は、その反応を見たらしく、
数時間後、こんな投稿が上がっていた。

「え…みんな変態過ぎーww
そんな結花に踏まれたいのー？ 🤪」

文章の最後に、冗談半分のような絵文字が並び、そして添付されていたのは、屋外のベンチの上に足を伸ばして座った状態で“足裏側”から撮られた自撮り画像だった。

(……！これは……！)

靴を脱ぎ、素足のまま、柔らかな日差しに照らされた白い足裏がカメラに向かって広がっている。

きれいな足指、ほんのり赤みを帯びた足裏の質感がそのまま写し出されていた。

まるで足フェチをわざと挑発するような投稿だった。

返信欄は一瞬で騒然となった。

「結花ちゃんの足裏くんかくんか」

「最高すぎる写真ありがとう！」

「その足に踏まれたい…」

普段の投稿に比べ、インプレッションは 10 倍以上、いいねの数も爆発的に増えている。

「え…なんかめちゃくちゃバズってるんだけど
ww

皆そんな結花の足好きだったの…？

結花の足ってもしかして需要あるの？ 😄」

困惑しながらも、どこか嬉しそうに綴られる結花の文章。

奏太はスマホを握る手に力を込めた。

自分のコメントがきっかけで——

彼女に“蟻を踏みながら踊っていたこと”を自覚させ、さらに“自分の足に需要がある”という事実まで彼女に突きつけたのだ。

（……俺が……結花ちゃんを……“気づかせた”んだ……）

胸の奥からこみ上げる奇妙な快感。

可愛い女の子が、無邪気に、無意識に、残酷さをまき散らし、
そして今——その“無意識”が“自覚”へと変わっていく。

奏太はその事実、喜びと興奮を覚えずにはいられなかった。

(……やばい……)

スマホの画面に映るのは、結花が投稿したばかりの足裏の写真。

カメラに向けて無造作に差し出されたそれは、ずっと靴の中に押し込められていたのか、ほんのり赤く湿った足裏が、光に照らされ艶めいていた。


肌の白さに浮かぶ淡い赤み。

指の付け根には、薄っすらとした汗が滲んでいるようにも見える。

(……たまんねえ……)

奏太の下半身がじわりと熱を帯びる。
視線は画面の一点に吸い込まれ、まるで舐める
ようにその足裏を凝視していた。

すると、立て続けに結花の投稿。

「実は今踊ってみた動画の撮影してました～

また近々アップするね～～😋」

(……！)

「踊ってみたの撮影してたって……」

(ってことは……今、あの公園で撮影してたっ

てことだよな……)

その瞬間、奏太の頭の中で何かがカチリと噛み合った。

(……今から行けば——もしかしたら……まだ“跡が残ってる”かもしれない)

気づいた時には、もう立ち上がっていた。

パソコンの前から飛び出し、スマホを握りしめ、玄関を飛び出す。

(頼む……まだ結花ちゃん以外に踏まれてませんように……)

結花がいつも撮影しているであろう公園は、奏太の自宅から徒歩数分の公園。

何度も動画で見た背景。滑り台、ベンチ、花壇。

その中でも、特に踏み跡が残りやすく、蟻もよく出現している“あの砂地”。

「着いた……」

公園に着くなり、奏太は人気の少ないエリアを順に歩きながら、動画で見た角度と照らし合わせていく。

——そして。

「……あった……あそこだ……」

公園の端、滑り台の前に広がる砂地。
そこだけ、明らかに同じ場所で何度も踏まれた
ように砂が凹み、靴跡が密集していた。

最初に動画を見たときと——まったく同じ場
所だった。

「……間違いない……ここで……さっき……」

奏太は、息を潜めるようにゆっくりとその場所
に近づいた。

地面をよく見ると、太陽に照らされた砂地に、
鮮明な靴底の模様がいくつも残されていた。

細かい波状のソールパターン。踵の丸み。

何十回も動画で目に焼き付けた、結花のパンプ

スの靴跡とまったく同じ形。

その周囲を歩き回る蟻達。

そして、その残された靴跡の上に、点々と——
動かない黒い粒があった。

(……これ……)

よく目を凝らす。

砂にめり込み、体をぐしゃりと潰された無数の
蟻。

踏み潰されたことで、黒く縮れたような体が、
靴跡の中に散らばっている。

中には、完全には踏まれず、まだピクピクと動
いているもの。

逆に何度も踏み直されたのか、体が千切れて形を失ったものもあった。

「……ヤバい……やっぱり……」

さっきまでスマホで見ていたあの足裏。

その足で、間違いなくこの場所で、つい今さっき何十匹もの蟻を踏み潰していた。

現実の地面の上に、それは物的証拠として、奏太の目の前に残されていた。

「……ヤバすぎる……！」

奏太は砂地の上にしゃがみ込み、息を詰めた。目の前に広がるのは、いつも画面越しに見て興奮に溺れていた光景そのもの――

いや、現実の質感は映像の比ではなかった。

砂地に無数に残る靴跡。

細かいソールパターンが重なり、深く抉れた部分には黒い粒が散らばっている。

結花に踏み潰された蟻の群れ。

ほとんどは押し潰され、砂に半分埋もれている。

(……これが……結花ちゃんが……踏んだ……
…“本物”だ……)

頭の中で、結花の可愛い笑顔と、先ほど投稿したおそらく踊り終わりに撮影したのであろう汗ばんだ足裏の写真がフラッシュのように交互に浮かぶ。

無邪気にステップを踏みながら、この光景を作

り出したその足。

コメントでは「蟻さんごめんね」と可愛い絵文字付きで謝っていた結花。

「結花ちゃん、謝ってたじゃん……それなのに……！」

先日の彼女の言葉とは裏腹に、現実には遠慮なしに踏み散らされた蟻たちの無残な姿が広がっている。

奏太の胸がドクンドクンと鳴り、頭が真っ白になっていく。

「もう蟻のこと分かってたはずなのに……それなのに……もう……無理……こんなの我慢できない……」

視界が揺れ、理性が溶ける。

彼女は分かってて、それでも踏んだ——そう思った瞬間、奏太の全身にゾワリと鳥肌が立ち、昂ぶりが限界を超えた。

砂地の上で息を荒げ、砂地に残った結花の靴跡と、踏みつぶされた蟻たちを見つめながら、汗ばんだ結花の足裏とその匂いを想像し、その場で下着の中に勢いよく射精した。

第三章　－会いたい－

目の前に広がる現実の光景。

動画で幾度となく見たその場所で、奏太は膝をついたまま、息を荒くしていた。

砂地に刻まれた、結花のポンプスの靴底跡。
その上に潰されて張り付いた数十匹の蟻達。

自身が踊りながら蟻を踏んでいたという事実を知って謝っていたはずなのに、それなのに、今、目の前に彼女が踏んだ証がはっきりと地面に残されている。

(……本当に……あの子が……)

あの無邪気な笑顔で、汗をにじませながら踊る可愛い結花。

その足が、何も気にせず足もとの命を踏みにじっていた現場に、自分は今立ち会っている。

こんな光景を見てしまったら、もう画面越しじゃ満足できない。

(……会いたい。直接……見たい……)

(あの顔で笑いながら……あの足で、あんな踏み方をしたんだって……自分の目で確かめたい……)



欲望が胸の内側で暴れ出す。

さっきまでの興奮が、より生々しい“行動の衝動”へと変わっていた。

＊ ＊

帰宅後、奏太はすぐにスマホで結花の SNS を開いた。

タイムラインを遡る中で、ある投稿が目飛び込む。

 【告知】 

来週 15 日（土） 20:00～

高円寺 Beat Base にてライブイベント出演決定



地下アイドルグループ「SweeD」も出演します



結花も全力で踊るよ～！会いに来てね 

小さなハートとマイクの絵文字。

その横には、いつものように笑顔でポーズを決

めた結花の写真。

(……これだ……)

目が冴えた。

血流が加速するのが分かる。

「行くしか……ない……！」

生の結花に、初めて会えるチャンス。

ステージの上、スポットライトを浴びて踊る彼女。そして、その足元。

(……生の結花ちゃんを……この目で見れる……)

脳内には、SNSの自撮り、動画のステップ、あの足裏写真——すべてがフラッシュのように

重なっていた。

(ついに……会えるんだ……)

期待と興奮が入り混じり、奏太の心拍はもう抑えがきかなくなっていた。

* *

そして、ついに——その日は来た。

曇り空の下、奏太は都内の小さなライブハウスの前に立っていた。

人通りの少ない路地。地下に降りる階段の入口。扉の横に貼られたポスターには、今日の出演グループ名と一緒に「SweeD」のロゴ、そして見慣れた顔——結花の笑顔が印刷されていた。

(……本当に……結花ちゃんがいるんだ……)

受付でチケットを購入し、中へ入る。
開演 30 分前、会場にはすでに 100 人ほどの観客がいた。

それほど広くないフロアは、ほどよくざわついている程度。

距離が近く、照明も控えめなこの空間は、“地下アイドル”という言葉の雰囲気そのものだった。

「近い……」

ステージまでわずか数メートル。
前方エリアはすでに埋まりつつあったが、中央付近からでも十分に表情が見える。

開演のアナウンスと共に、照明が落ちた。
SE が流れ——ステージに、3 人の少女が登場する。

「SweeD でーす！ よろしくお願ひしまーす♡」

明るい声とともに、観客から拍手と歓声が上がる。

3 人はお揃いの、白を基調にした清楚な衣装。
黒のロングブーツも同じデザインで統一されていて、膝下まである艶やかな合皮の質感が照明を反射していた。

その中で奏太の視線は、ただ一人の少女に釘付けだった。

「……結花……ちゃん……」

ライトの下で微笑む、あの顔。
動画で何度も見た、あの笑顔。

長いまつ毛が影を作る大きな瞳。白くてきれいな肌。小さな顔に通った鼻筋。そして、何よりも——スラリと伸びた脚。

(……やっぱり、可愛い……いや、写真よりも……もっと……)

微笑みながら挨拶を済ませた結花が、他のメンバーと並び、最初の楽曲が始まる。

軽快なリズムに合わせて、一斉に動き出す3人。

狭いステージを目一杯使いながら、ターンし、足を踏み出し、笑顔で振りをこなしていく。

その瞬間、奏太の意識は足元に集中していた。

(……この脚で……あの公園で……何十匹もの蟻を……)

脳裏にフラッシュバックするのは、動画で見たステップ。

結花のパンプス足が踏み下ろされ、地面に押し潰された黒い蟻たち。

そして先日、自らの足で赴いたあの公園の光景。

——砂地に刻まれたソール跡。

——そこに張り付いていた、潰れた蟻の残骸。

(……その全てを、目の前の可愛い女の子の足が……)

ブーツで隠されてはいるが、その中には確かに、あの足がある。

あの、汗ばんでいた、写真に写った足裏。ステップのたびに空気を押し出すように、その内部で足が動いていることを想像するだけで、奏太の中で興奮がせり上がってくる。

(……本物の結花ちゃんが、目の前で……)

可愛い笑顔と無自覚な加虐性。動画で何度も興奮し、果てた存在が、今この現実にいる。

いつの間にか、奏太の股間は膨らみ、身体が熱を帯びていた。汗がにじみ、手のひらが湿る。

(……だめだ……まだ始まったばかりなのに……)

でも、もう目を逸らすことなどできなかった。

本物の彼女が、本物の足で、本物のステージを踏んでいる。

それだけで、奏太は現実を飲み込めないほどの衝撃と悦びに包まれていた。

* *

ライブはあっという間だった。

曲数は5曲のみ。彼女の足に見入っている間は永遠のようで、終わってみれば刹那のような時間だった。

——公演が終わると、息を整えたメンバー達が

ステージ中央に並び、物販の案内がされた。

「このあと、物販やりまーす！！」

「グッズを買ってくれた方は、好きなメンバーと握手&ツーショット写真が撮れまーす！」

(買うしかない……)

即決だった。

財布の中を確認する余裕もなく、奏太はグッズ列へと並び、迷わず「結花」と書かれたブロマイドセットを購入した。

それは、“彼女に近づける券”でもあった。

握手&撮影列に並びながら、心臓が喉の奥でバクバク鳴っているのが分かった。

(ちゃんと話せるか……?)

(変なこと言ってしまうかないか……?)

(でも……伝えたい……この気持ちを……)

——そして、ついに。

「はい、お次の方～！」

前の客が去った瞬間、彼女が振り返った。

「今日は来てくれてありがとうございました
～っ！」

ライブ直後、まだ頬が火照っている。

笑顔はいつも通り可愛いのに、肌に浮かぶ汗と、
声の息づかいに生っぽい熱が宿っている。

そのまま、結花は両手で丁寧に手を差し伸べて
きた。

(……近い……)

思わず飲み込んだ唾が、喉に引っかかる。

小さくて白くて、ふわっとした肌触りの手。
触れた瞬間、ほんのりと湿っていた。

ライブで流れた汗の名残だろう。けれど、それが妙にリアルで、甘くて柔らかい匂いに混じる、ほんの少しの汗の香りが——

(……うわ……匂いまで……これが結花ちゃんの匂い……)

一気に頭が熱くなるのを感じながら、奏太はやっとの思いで口を開いた。

「ゆ、結花ちゃんの踊ってみた動画……いつも見てます！ めちゃくちゃファンです……！」

声が裏返りそうになるのを必死に堪える。
だが、結花はまったく気にする様子もなく、むしろとびきりの笑顔で返してくれた。

「え～っ！ 嬉しい～！！ありがとう～っ！」

キラキラと瞳が弾け、満面の笑顔でこちらを見上げるその表情に、奏太の理性は完全に焼き切れた。

（可愛すぎる……こんなのもう……）

そして、スタッフに促されるまま隣に並び、結花と並んでツーショットを撮影。

結花は、奏太の肩にそっと手を添え、カメラに

向かって笑顔を向けてくれる。

その一瞬、汗の香りと柔軟剤の匂いが混ざり合ったような、現実感のある女の子の香りが鼻先をくすぐった。

——夢のような時間だった。

撮影が終わり、「ありがとね〜！」と手を振ってくれる結花を名残惜しく見つめながら、奏太はフラフラと足を引きずるようにライブハウスを後にした。

(……本当にいた……本当に握手して、話して、匂いまで感じた……)

画面越しで何十回と見てきた存在が、今、自分の記憶と身体の中に“現実”として刻み込まれている。

ただ可愛いだけじゃない。優しさも、丁寧さも、すべてを含んだ“本物”の彼女。

とても足元で何十匹もの命を踏みにじりながら踊るような女の子には見えない。

だが、そのギャップがたまらない。

奏太は、改めて強く思った。

(……もう……完全に、堕ちた……)

帰り道、奏太は電車の中でもずっとスマホを手放せなかった。

駅のホーム、車内、信号待ちの横断歩道——
ふとした瞬間に結花の笑顔が頭をよぎり、
握手のときの柔らかい感触や、間近で感じた甘

い香りが鼻腔に残っていた。

「……本当に……夢みたいだった……」

帰宅して部屋の明かりをつけると、すぐにスマホのアルバムを開く。

ツーショット写真を拡大して、何度も見返す。

隣で笑う結花。肩に添えられた小さな手。
少し火照った頬、輝く瞳。あの時感じた息づかいが、また蘇ってくる。

「……結花ちゃん、ほんと可愛かったな……」

そのままベッドに腰を下ろし、余韻に浸っていると――

ピロンッ

スマホが鳴った。

画面に表示されたのは、「YUKA_結花が新しい投稿をしました」という通知。

慌てて SNS を開く。

「今日はライブ楽しかった～！ ✨
来てくれたみんなありがとう～っ♡♡♡」

カラフルな絵文字が踊る、いつもの結花らしい可愛い文体。

添えられた写真には、舞台袖と思しき場所でポーズを取る彼女の姿。

——そして、その投稿から数十分後。

「ライブ後の結花の足👣
いっぱい踊ったからちょっとくちやいかも…
💔💧」

(……！)

え……と、思う間もなく、
添付されたのは、ブーツを脱いで素足になった
状態の足裏のアップ写真。

ステージの照明で火照った肌。
指の間にうっすらと汗が滲み、薄っすらと赤く
なった足裏。

ロングブーツで密閉された状態で蒸されたそ
の生々しい足裏が、カメラに向かって広がって
いた。

「なんか皆結花の足好きみたいだし、投稿してみたよー（笑）どうかな？（笑）💧」

「……ヤバすぎる……」

——完全に、崩れた。

数時間前、確かにこの足がステージの上で、ブーツの中で汗ばんでいた。

その足で踊り、ジャンプし、ターンを決め、笑顔でファンサをしていた。

自分はその熱気を浴びながら、同じ空気を吸っていた。

（あのブーツの中身が……今、こうして目の前に……）

湿った赤み、綺麗な指先、薄っすらと砂埃がついたかのような踵…。

スマホ越しでも匂いを感じたような錯覚に、股間が熱を持って膨らんでいく。

理性はとうに吹き飛んでいた。
気づけば、コメント欄に指を走らせていた。

「ライブ最高でした！
それに……結花ちゃんの足も最高過ぎる……
ライブ後の結花ちゃんの足、匂い嗅いでみたい
……」

送信を押した瞬間、ドクンと心臓が跳ねる。
だが後悔する間もなく、すぐに通知が来た。

「YUKA_結花があなたのコメントに返信しました」

開くと、そこには——

「www やだー、変態ー🍆🍆」

絵文字付きの軽いノリ。
けれど、拒絶のニュアンスは感じない。
むしろ面白がっているような……そんな温度。

「……あぁ……堪らない……」

自分のフェチを、本人に直接伝えた。
しかも、その相手から“リアクション”が返ってきた。

動画を見て妄想していた日々。

蟻を踏む足を画面越しに観察していた日々。

あの日、現場に足を運び、踏み跡と潰された蟻を見て果てた自分。

すべてが今、現実と地続きで繋がっている。

彼女は笑っていた。

自分のフェチ性満載のコメントに冗談交じりに“変態”と返してきた。

奏太の中で、結花の“足”はもはやただのフェチの対象ではなかった。

神聖で、破壊的で、無邪気で、残酷で、そして甘い。

そんな彼女の“足”のすべてに、奏太はもう完全に飲み込まれていた。

(……もう、我慢できない……)

奏太は、スマホを手にもってベッドに倒れ込んだ。

頭の奥で、今日のライブの光景が何度もリプレイする。

ステージライトの下で笑顔を振りまく結花。
ロングブーツ越しの綺麗な彼女の足。
握手会で感じた甘い香りと、生の息づかい。

そして――

スマホの画面に映る、つい数分前に投稿された
結花の足裏画像。

「……これが……さっき……」

赤みを帯び、指の間がうっすら湿った足裏。

ライブ終わりで熱を残したその肌。

ブーツを脱いだばかりの素足から漂っているであろう匂いが、画面越しに幻のように立ち上ってくる。

(……ブーツの革の匂いに混じった汗の酸味、ツンツとする足臭……)

脳内で勝手に匂いの想像をする。

結花が「くちゃいかも」と自ら書いていた一文が、その妄想に現実味を与える。

スマホを持ったまま、奏太は無意識に画面を鼻先へ近づけた。
まるで、そこに本当に結花の足があるかのように。

(……この足で……あの公園の蟻たちを……)

(……その足の匂い……)

頭が真っ白になり、全身が熱に包まれていく。
視界の端で、結花の笑顔、汗ばむ足裏、踏み散
らされた蟻たちの光景が次々に重なり合い――
――

奏太は、息を荒げながら、そのままベッドの上
で妄想に身を委ね、結花の足裏が映し出された
スマホ画面に鼻を押し付けながら、股間をしご
き、自分を慰めた。

果てた後の快樂の余韻の中、スマホの画面には
まだ、あの赤く湿った足裏が映し出されていた。

(……結花ちゃん……やっぱり……最高だ…
…)

第四章　—ついに来たチャンス—

毎晩のように、動画を繰り返し再生し、結花の足裏写真を見返し、画面の向こうに漂う結花の足の匂いを想像しながら自分を慰める。

その行為は、もはや習慣になっていた。

（……本物の匂いを嗅いでみたい……あの足を、目の前で見たい……）

そんな悶々とした日々を送っていたある日の午後、スマホに SNS 投稿通知が届いた。

「今から踊ってみたの撮影頑張る！ ✨👉」

(……！)

(……え……今から……ってことは……)

心臓が跳ねた。

あの公園だ。

今、彼女はあの場所にいる――。

奏太は仕事用の PC を閉じると、ほとんど反射的に部屋を飛び出した。

小走りで公園に向かう。

頭の中はもう、画面の向こうで何度も見た風景のイメージでいっぱいだった。

そして、撮影候補になりそうなポイントを順番

に巡る。

——いた……。

前回、蟻が踏み散らされていたあの砂地。
滑り台の前、日差しがちょうど当たる小さな広
場。

その真ん中に、かわいいワンピースを着た結花
が立っていた。

動画で何度も見たあの黒いペタンコパンプス。
甲に小さなリボンがついていて、素足が覗いて
いる。

(……本物だ……)

心拍数が跳ね上がる。

不審に思われないように、奏太は公園の周囲を歩く通行人のフリをしながら、遠巻きに様子うかがった。

可愛い笑顔でカメラに向かってポーズを取る結花。

スタッフらしき人はおらず、スマホを三脚に固定して一人で撮影しているようだ。

やがて結花が踊り始めた。

軽やかなステップ、ターン。
風に揺れる髪。

汗ばんだ肌が日差しに照らされ、うっすらと光って見える。

(……今も、あの足の下で……)

奏太の喉が鳴る。

蟻を踏み潰すあの動画のシーンが頭の中で蘇る。

そして目の前の現実と重なり合う。

もっと近くで見たい…。

もっと鮮明に足元を見たい…。

奏太は、カメラに映らないギリギリの距離を保ちながら、踊る彼女の横を通行人を装って通り過ぎる。

視線は、結花の足元だけに注がれていた。

——そして、チラッと視線を結花の足元へ落とす。

砂地には、結花のソール跡が幾重にも重なり、その上に今日も無数の黒い粒が動かなくなっているのが見えた。

(……ヤバい……)

ちょうどその時、結花が右足を大きく踏み出した。

その靴底が、地面を歩いていた蟻の上に——ズツ——と被さる。

足を上げた瞬間、砂地にくっきりと残るソールの跡と、潰され、動かなくなった黒い粒。

脳内で、動画の BGM が勝手に鳴り出す。

画面越しではない、“本物の”踏み潰しが、今この目の前で繰り広げられている。

(……もう無理……)

股間が痛いほど膨らみ、心拍が耳の奥で爆音のように鳴る。

歩き方がぎこちなくなるのを感じながら、奏太はその場を離れるしかなかった。

背後からは、相変わらずステップを踏む結花の靴底が砂を擦る音が聞こえていた。

「ヤバい……ヤバすぎる……！」

息が荒い。

胸が苦しい。

鼓動が耳の奥で爆音のように響く。

奏太は、ふらつく足取りで公園のトイレに駆け込み、個室のドアを閉めた。

便座に腰掛け、両手で頭を抱える。

頭の中で、たった今見た光景が何度も再生されていた。

可愛い笑顔の結花が、

黒いリボンの付いたペタンコパンプスで、

砂地の上の蟻たちを気にもせずに踏みながら踊っていた――

そのステップの一つひとつが、奏太の視覚と嗅覚と鼓動に焼き付いている。

(……夢じゃない……目の前で本当に……)

ステージの上で見た笑顔。

汗ばんだ足裏の写真。

そして今、自分の目の前で、まったく同じ足が
蟻を踏んでいたという現実。

そのギャップが、奏太の理性を揺さぶる。

(あの可愛い顔で……あの無邪気な笑顔で…
…)

(ただ地面を歩いていただけの小さな命を…
…次々と、靴底で……)

頭の中で、結花の足が蟻を踏む瞬間の光景がス
ローモーションのように流れる。

ステップのたびに、砂が舞い、靴底の跡が刻まれ、その上で黒い粒が動かなくなる。

そのたびに、脳の奥で“快感”に似た電流が走る。胸の奥がきゅっと締め付けられ、下腹が熱くなる。

(……もう、だめだ……)

思考が途切れ途切れになり、呼吸が浅くなる。

それでも、止められなかった。
今見た光景が、脳内で映像どころか匂いと温度を伴って再生される。

便座に腰掛けたまま、全身が熱に包まれる。

背中が反り、指先が震え、喉の奥から声が漏れそうになる。

(……結花ちゃん……！結花ちゃん……！あ
っ……！！)

ピュッ！……ピュッ！…ドピュッ……！

奏太は便座に座りトイレットペーパーを股間
にあてがい、脳に焼き付いた結花が蟻を踏む瞬
間の光景と、足の匂いを想像しながら頭がおか
しくなるほどの興奮の末、思いっきり射精した。

* *

トイレの個室で、ひとしきり興奮の波を放出し
たあとも、奏太の胸の高鳴りは収まらなかった。

(……まだ、今もあの子は……)

個室を出て呼吸を整える。手洗い場の鏡に映る自分の顔は、明らかに火照っている。

トイレから出て、外の空気を深く吸い込む。

目線を少し先にやると、結花はまだ撮影を続けていた。

砂地の上、清楚なワンピース姿の彼女がリズムに合わせてステップを踏んでいる。

その姿は変わらず可愛くて、そしてさっき見たばかりの“無自覚な残酷さ”の記憶が、頭の奥で揺れる。

(……話したい……)

衝動のような感情が込み上げてくる。
ただ見ていたいただけじゃない。
この気持ちを、声にして届けたい。

そう思ったら、もう抑えられなかった。

奏太は決意を胸に、あくまで自然に、偶然居合わせた通行人を装って近づく。

——カメラの映り込みを避ける角度で、彼女の様子を少し離れて見つめる。

結花の視線がふとこちらに向く。

目が合う——その瞬間、奏太の喉がひとつ鳴った。

踊り終えた結花が、笑顔のまま軽く息を整え、

三脚に取り付けたスマホの画面を確認している。

(今しかない……)

驚かせないようにゆっくりと近づく。

「あの……SweeD の結花さんですよ？ いつも動画、見てます……」

声が震えそうになるのを必死で堪える。
それでも、言葉はちゃんと届いた。

結花の目が一瞬ぱちくりと瞬いたあと、ぱっと笑顔が広がった。

「え、そうなんですか！？ 嬉しい～っ！」

その表情は、動画の中の彼女そのまま。
無邪気で、素直で、あたたかい。

「あれ、もしかして——この前のライブ来てくれた方ですか？」

不意のひと言に奏太の心臓が跳ねる。

「え……はい。覚えててくれたんですか……？」

「覚えてますよ〜っ！ 写真撮ったでしょ？
あのとき、肩にちょこんと手を置いたやつ！」

指を立てて、笑顔で思い出するように語る結花。

「えー、嬉しいなあ。こんな所で話しかけてもらえるなんて……私、有名人みたい～！ うふふっ」

(……覚えててくれたなんて……)

目の前で屈託なく笑う結花に、奏太はもう胸がいっぱいだった。

「結花ちゃんの踊ってみた、いつも見てるから……

たまたま散歩してたら、結花ちゃんっぽい人が踊ってて、もしかしてって思って……まさか……本物だったなんて……」

「えーっ！　すごい偶然～！　でも、嬉しい！　こんな形でファンの人に会えるなんて……！」

言葉に満ちるのは、まったく作り物のない喜びのトーン。

本当にファンを大切にしている“良い子”なんだと、改めて痛感する。

（こんな優しい良い子が……蟻を……足で…
…）

そう思った瞬間、奏太の中で再び興奮がざわついた。

けれど、それを押し殺して笑顔を返す。

「あの……もし良かったら、結花ちゃんが撮影してるところ、もう少し見させてもらっても良いかな……？」

勇気を振り絞って、奏太は遠慮がちに声をかけた。

結花は一瞬目を丸くしたが、すぐに柔らかい笑顔を浮かべた。

「え、うん！大丈夫だよ！ ちょっと照れくさいけど……（笑）」

胸の奥が一気に熱くなる。

（……間近で……見れる……）

今まで画面の中でしか見られなかったものが、今この距離で、しかも本人公認で目の前に展開されようとしている。

結花はスマホを三脚にセットし、ワイヤレスイヤホンを耳に差し込むと、定位置に立った。

足元には、相変わらず蠢く黒い粒たち——蟻。

(……来るぞ……)

奏太の胸がドクンドクンと高鳴る。
体温が一気に上がるのが分かった。

「じゃあ、もうワンテイク踊るね！」
結花は軽く手を振ってから、耳元のイヤホンをタッチし、音楽をスタートさせる。

——そして、始まった。

可愛い笑顔を浮かべながら、軽快なステップを刻む結花。

ワンピースの裾が揺れ、細い脚がしなやかに動くたびに、砂地に散らばる蟻たちの上へと靴底が降りていく。

“ズリッ”“ジャリッ”――

生きた蟻を巻き込みながら、靴底が砂地に擦れるその音がはっきりと響いた。

(……うわ……)

砂が舞い、ソールの跡が鮮明に刻まれ、その中で動かなくなる黒い粒。

一度踏まれた上に、ターンのたびに再び踵やつま先が下り、捻られ、押し潰されていく。

(……ヤバい……ヤバすぎる……)

視線は完全に結花の足元に釘付けだった。

顔を上げると、結花は相変わらず無邪気な笑顔のまま。

そのギャップが、奏太の心拍をさらに加速させる。

可愛い顔、綺麗な脚。

そして、その足元で容赦なく繰り広げられる残酷な行為。

(……もう……本当最高すぎる……)

胸の奥がぎゅっと掴まれるような感覚。

股間が熱を帯び、ガチガチに硬くなるのが自分でもはっきり分かる。

呼吸が浅くなり、視界の端が白くなる。

(……もう……)

その瞬間、奏太は完全に“生の結花”の光景に飲み込まれていた。

踊り終え、結花が音楽を止めると同時に、ステップの余韻そのままに、軽い足取りで奏太の方へ駆け寄ってきた。

額にはまだ細かい汗が光っている。
胸元を上下させながら、無邪気な笑顔で覗き込んでくる。

「どうだったかな……？　上手く踊れてました？」

その顔があまりにも近くて、奏太は一瞬息が詰まった。

「う、うん……すごく良かった……すごく……」

言葉が上手く出てこない。

本当は「踊り」よりも、結花の足元で繰り広げられていた光景にばかり意識が行っていたのに。

そんな奏太の視線に気づいていたのか、結花は首を傾げながら尋ねてきた。

「ねえ、なんか私の足元ばかり見てませんでした？（笑）」

「……！」

心臓が跳ねる。

まさか、本人に気づかれていたなんて——。

「い、いや……その……」

しどろもどろになった声に、結花は頬を膨らませて小さく笑う。

「んー？　なんか怪しいなあ……

私の足、なんかおかしかったですか……？」

少し不安そうな目が、奏太の胸に突き刺さる。
あまりの可愛さに、頭の中が真っ白になった。
そして、抑えきれず口が勝手に動いていた。

「いや……その……
結花ちゃん、踊りながら……蟻をたくさん踏んでるなって思って……」

(ついに言ってしまった……)

一瞬の沈黙。

次に返ってきた声は、意外なほどあっさりしていた。

「え……そんなところ見てたんですか？ (笑)
なにそれー (笑)」

拍子抜けするくらい軽い笑い声。
奏太の方が戸惑う。

「あれ、結花ちゃん……足元に蟻がたくさんいたこと、知ってたの……？」

「うん。なんか前も動画のコメントで同じようなこと言われたことがあって……。

その時初めて気にして見てみたら、確かに地面にいっぱい蟻さん居たんですよ。

私、普段あんまり足元とか見ないから気づかなくて……」

少し照れるように笑いながら話す結花。

「でも、この場所背景とかも気に入ってて、場所変えるのもなーって思って……
蟻さんには悪いけど仕方ないかなって……」

——その瞬間、奏太の脳内で何かが弾けた。

(……仕方ないって……)

後頭部を殴られたような衝撃。
全身の血流が一気に加速するのが分かる。

これまでの“無自覚な残酷さ”が、今“わざと”という事実書き換えられていく。

(……この可愛い顔で……分かってて、あの足で……)

目の前にいるのは、笑顔で汗を光らせるとびきり可愛い女の子。

けれど、その足元の砂地には——彼女が“分か

っていて”踏んだ何十匹もの蟻が潰れている。

(……ヤバい……ヤバすぎる……！)

奏太は笑顔を作りながらも、胸の奥で鼓動が爆音のように鳴り響き、
頭の中で、結花の可愛い顔と汗ばんだ足裏、そして“わざと踏み散らした”蟻の映像が何度もフラッシュのように弾けていた。

「そ……そうなんだ……」

結花の言葉を聞いた瞬間、奏太の声が裏返しそうになった。

自分の中で勝手に作っていた「無自覚」という幻想が崩れ去り、たった今確定した“分かっている”という事実が脳内でぐるぐると渦を巻く。

目の前で汗を拭いながら笑う彼女の顔。

無邪気そのもので、まるで罪悪感なんて微塵もない。

そのギャップが、奏太の頭をぐらつかせた。

(……興奮が……抑えきれない……)

その様子を見た結花が、少し心配そうに眉を寄せた。

「あれ……もしかして……引かれちゃいました……？」

首をかしげながら、手のひらを頬に当てるような仕草。

その何気ない動きさえ、奏太の心を揺さぶった。

「ううん、全然……！
むしろ……見入っちゃったというか……
個人的には……むしろ“好き”というか……」

気づけば、口が勝手に動いていた。
これまで誰にも言えなかった自分の“嗜好”が、
今、自然と漏れ出していた。

結花の目がぱちくりと瞬く。
そして次の瞬間、くすっと笑った。

「え～何それ～www
“好き”って、私が蟻さん踏んじゃうところが好き
ってこと～？」

(……ヤバイ……言っちゃった……)

動揺する奏太とは対照的に、結花はまるで新しい遊びを見つけた子どものように興味津々の顔をしていた。

「えっと……うん……

結花ちゃんみたいな可愛い女の子が、足で……残酷なことしてるっていうギャップが、なんか良いっていうか……

見入っちゃって……変だよね。ごめんね……」

視線を落とし、声も少し小さくなる。

でも——返ってきた言葉は、想像とは全然違った。

「うん、確かに変わってるかも（笑）

でも大丈夫ですよ。」

「私、普段からアイドル活動してるからイベン

トとかでいろんな人に会うし、SNS でも本当いろんな癖……じゃなくて、個性？（笑）の人がいるのも知ってるし、結構そのへんの耐性あるというか、そういうの“ありえる”って思ってるタイプだから。」

言葉に棘がない。

笑いながら、軽やかに受け止めてくれている。

「むしろ最近、私が足の写真上げたらめっちゃくちゃバズったし（笑）」

「“足好き”な人って思ったより多いんだな〜って。

だからそういう人がいても、全然不思議じゃないし。

私、特になんとも思わないですよ？」

そして、にっこり。

「むしろ、需要があるなら——そういうの、どんどん出していこうかなって思ってるくらいですから(笑)」

(……………)

奏太は絶句した。

「足フェチ」「踏み潰し」という、自分の中でずっと“誰にも言えない領域”だった嗜好が、今、その癖の対象だった結花にあっさりと受け入れられ、しかも面白がり、むしろ自発的にそういう需要を取り込みたいとすら言っている。

(……この子、やばい……)

興奮と戸惑い、嬉しさと罪悪感。
すべてが入り混じりながら、

奏太の中で、“結花”という存在が完全に別格のものへと昇華されていった。

第五章　—止まらない欲望—

「せっかくだから、今後の参考にいろいろ聞いちゃおっかな！」

結花は、ニコニコと笑いながら、まるで雑談でもするような気軽さで言った。

「えっと、お兄さん……お名前、聞いてもいいですか？」

急にそんなふうに見つめられて、奏太の胸がドクンと跳ねた。

「あ……中谷奏太、です。」

「奏太さんね！」

その瞬間、結花にはっきりと自分の名前を覚えられたという事実、妙な熱が体の奥から沸き上がる。

「奏太さんは、私が蟻さん踏むところを見るのが好きって言ってましたけど——
もうちょっと詳しく、聞かせてもらってもいいですか？」

あまりにもストレートな“掘り下げ”。
そこにまったくの悪意も下心もなく、ただただ好奇心で聞いていることが表情から伝わってくる。

(……すごい子だ……)

正直戸惑いがなかったわけじゃない。

だが、引かれなかったという安堵と、
それどころか受け入れてくれた喜びが、奏太の
口を自然に開かせた。

「……さっきも少し言ったけど……
可愛い子が、無意識に足で残酷なことしてる…
…そのギャップがすごく刺さるっていうか…
…
……つい、見入っちゃうんだよね。」

少し間を空けて——
呼吸を整え、続ける。

「それと……その……
そういう行為をしてる足とか……靴とかの、匂
いも……気になって……
想像して……興奮するっていうか……」

言葉にした瞬間、全身が熱くなる。
それを本人に対して、今、はっきりと言っているという現実には、
羞恥と快感が入り混じった奇妙な浮遊感が襲ってくる。

結花は、まったく嫌悪感を見せず、むしろ興味津々の顔でうんうんと頷いていた。

「へえ～……ほんと、いろんな人がいて面白いな～w」

そして、思わせぶりの笑みを浮かべたまま、言葉を重ねた。

「つまり奏太さんは——」

「私が何も気づかずに、にこにこ笑いながらステップ踏んで……」

足元で蟻さんをいっぱい踏んじあって……
それを見て“うわ…”って興奮しちゃって……
私の足とか靴の中の匂いも想像して、もっと興奮しちゃうってことですよね？」

……………！！

——全てを言語化された。

完璧に。

しかも本人の口から。

(…………ああ…………)

耐えきれないほどの恥ずかしさと、正体を見透かされた快感が一気に押し寄せる。

奏太は言葉を失い、ただ、こくん……と小さく頷いた。

「ふふっ、そうなんだ～。なるほどなるほど…
…♪」

その反応を見て、結花はどこか満足そうに笑った。
少し冗談めかした声色で、でも確かに興味を込めて続ける。

「やっぱ、私の足って需要あるのかな～。
もっとそういう人向けにもアピールしようかな～w」

そして、小さくポツリと、呟くように言った。

「……なんか良い方法ないかな～……」

無邪気で悪意のないその一言が、奏太の中の理性を揺らした。

胸がまた、ドクンと大きく鳴る。

(……この子……“踏んでる”自覚がある上で……むしろそれを武器にしようとしてる……?)

(しかも、それを……ちょっと楽しんでる……?)

ゾクリと背筋を何かが這い上がるような感覚。それは恐怖でも嫌悪でもなく——絶対的な興奮だった。

(……これ……もしかして、チャンスじゃないか……?)

思わず本音をさらけ出した結果、結花は引くどころか興味津々で聞き入れてくれている。

それどころか、「需要があるならアピールしていきたい」とさえ口にした。

奏太は瞬時に判断を下した。

「あの……実は俺、フリーランスでネット系の仕事してて。

動画とかメディア系のこと、そこそこ詳しくてさ。

もし、結花ちゃんが本気でそういう方向にアピールしていききたいなら……協力できるかもって、思ってる。」

一瞬の沈黙。

だが結花の反応は、驚くほど前向きだった。

「えー！すごい偶然！　本当ですか！？　嬉しい！」

ぱあっと笑顔になる。

「正直ね……今の純粋な地下アイドル活動だけだと、現実問題けっこう厳しくて……

過激なのは無理だけど、

お金になるなら多少そういう系のコンテンツ販売とかも……やってみたいなって……ちょっと前から考えてて……。」

少し恥ずかしそうに視線を落としながら、でも

言葉には本気が滲んでいる。

(……乗ってきた……！)

奏太の中で、何かが跳ねた。

「是非是非！

俺も結花ちゃんのファンとして、力になれるなら本当に嬉しいし。

やれることなら、なんでも協力するよ！」

「……嬉しい……！」

結花は胸元で両手をぎゅっと握りしめてから、ふと表情を曇らせる。

「でも……私、お金とかそんなに無いし……

奏太さんにお返しできるもの、あんまり無いですよ……」

「いや、ううん。お金なんて本当にいらないよ。結花ちゃんの力になれるだけで、俺としても幸せだから。」

その言葉に、結花は目をぱちくりさせたあと、口元に手を当てて笑った。

「え……でもさすがに完全ボランティアでっけのも、こっちが悪い気がしちゃうし……」

奏太は、そこで一拍置いて言った。

「じゃあ、もし……そこまで気にしてくれるなら——
ひとつだけ、お願い聞いてくれたら嬉しいな。」

「ん？　どんなことですか？」

その問いに、奏太は一瞬の逡巡のあと、勢いに任せて口を開いた。

「……その……今後、撮影とかコンテンツ作る過程で……

結花ちゃんが……蟻とか虫を踏むところを、もっと間近で見せてほしいっていうのと……

その……あと、できれば、靴とか足の匂いも…
…嗅がせてもらえたらなって……」

息が詰まりそうだった。

でも、それが本音だった。

そして——奏太が意を決して伝えた願望に驚くほどあっさりとした返答が返ってきた。

「えっ……それだけでいいの……？」

結花は、呆れたような、でもどこか楽しげな声でそう言って、

「そんなことで良いなら、全然やりますよ？」

「……！」

その瞬間、奏太の視界がじわっと滲んだ。

(……まさか……こんなあっさり……)

彼女が目の前で踏むところを、間近で見せてもらえる。

あの黒いリボンのパンプスで、また蟻を——。

そして、あの足の匂いを——

想像して幾度となく果ててきたあの匂いを——

実際に、嗅がせてもらえる——。

頭の中で、“これからの展開”が幾重にも想像される。

(……ヤバい……夢みたいだ……)

興奮が一気に爆発しかける。

だが、ここで感情に任せてへたを打つわけにはいかない。

奏太は、とてつもない興奮を感じながらも、冷静に今この状況が確実に“次のステージ”に繋がっていると確信していた。

* *

その後、結花と奏太は近くのカフェで話し込み、方向性はすぐにまとまった。

活動スタイルは表の地下アイドル活動とは明確に分けた、足フェチ特化の“別人格”としての裏垢運用。

投稿内容の主軸は――

- ・足元にフォーカスした踊ってみた動画
- ・実際に日常で使っている靴や靴下、足裏の画像投稿

・匂いや質感を想像させるような文面の投稿

それらを、根っからの足フェチである奏太が構図・文章・演出の面から徹底監修し、有料会員向けコンテンツとして展開する。

話はどんどん進み、現実味を帯びていく。

——と、その時だった。

「結花ちゃん、一応確認だけど……
半分仕事とはいえ、蟻とか虫をわざと踏むのって、抵抗とか……大丈夫？」

結花はドリンクのストローをくるくる回しながら、あっさりと答えた。

「うん、ちょっと可哀想だとは思うけど……
でもそれだけでお金になるなら、全然踏めちゃえますよ？」

(……！そっか……)

その瞬間、奏太の心拍が一気に跳ね上がる。
“無自覚”から“許容”へ、そして今——“能動的”
に踏む選択を口にした。

しかも、それが結花の口から、可愛い笑顔と共に言葉として発せられた。

(ヤバい……本当たまらない……)

ズボンの中で、股間はあからさまに反応してズボンはパンパンに膨らんでいた。

——そして、それを結花は見逃さなかった。

「奏太さん……もしかして今、興奮してます…
…？(笑)」

その問いかけに、もう隠す余地はなかった。

「……え……うん……ごめん、正直……めちゃ
くちゃ興奮してる……」

「ふふっ、私が“蟻さん踏める”って言ったか
ら？(笑)」

「……うん……そうだね……」

情けないほど正直な返答だった。
けれど、結花は軽く微笑んで、肩をすくめるよ
うに言った。

「ふふっ、なんか可愛いかも。」

そして、まるで悪戯っぽく囁くように続けた。

「じゃあ……今日のお礼に……試しに私の足、嗅いでみますか……？」

「……ッ！！？」

「……え！いいの……？」

「うん。色々協力してもらって、本当に助かったし。

そんなことくらいで喜んでもらえるなら——
いくらでも。」

笑顔で、優しく、あっさりと。

その瞬間、奏太の鼓動は爆音になった。
耳の奥が熱くなり、視界が狭まり、身体がほんの少し震える。

（まさか……こんな……）

画面越しに妄想していた匂い。
あの汗ばんだ足裏。

“想像”だけで何度も果てたその存在が、今——
本人の口から、嗅いでいいと言われた。

次の瞬間、世界が変わることを、奏太は確信していた。

「じゃあ……せっかくだから……嗅がせてもらおうかな……」

奏太の声は少し震えていた。
だがそれは緊張と興奮、そしてこの状況が現実
であることへの戸惑いが混ざったものだった。

「ふふっ……うん！　どーぞ♪」

「でもどうしよう……？　さすがにここでっ
てのはおかしいし……。」

結花はまるでジュースでも渡すような軽いノ
リで答えた。

その顔は相変わらず、あどけなく、そして無邪
気だった。

「あの……わがまま言って申し訳ないんだけ
ど、せっかくならさっきの公園で、結花ちゃん

が踏んだ蟻を見ながら……

結花ちゃんの履いてる靴の匂い嗅がせてもらいたいんだけど、いいかな……？」

少し息を呑むような間の後、結花は笑った。

「えー、すごいマニアック w
うん、私はそれでも大丈夫ですよ。」

(……マジで……？)

信じられない展開に、心臓の音が耳の奥に響いていた。

——そして、カフェを出て再び2人はあの公園へ戻る。

砂地には、さっきの撮影の痕跡がそのまま残っ

ていた。

無数のソール跡。その中に潰れた黒い粒が点々と広がっている。

撮影場所の近くのベンチに結花が腰掛ける。

「じゃあ、脱ぎますね？」

そして、右足を少し持ち上げると――

カポッ……

やわらかな音を立てて、黒いペタンコパンプスが結花の素足から外れた。

奏太の息が止まりそうになる。

(……脱いだ……今、脱がれた……)

足の甲がほんのり赤く、湿っているようにも見えた。

その足から、ついにパンプスが脱がれた。

「はい、じゃあこれっ！ 奏太さんの好きにしてもらって良いですよ？」

結花はにこっと笑いながら、脱いだ右足パンプスを手渡してくる。

「うん……ありがとう……」

奏太は両手で慎重にそれを受け取る。

ずっしりとした“熱”が、まだ残っていた。

目を落とし、手の中の靴を凝視する。

女の子らしい小さいサイズの黒いリボンのついたペタンコパンプス。

表面は小傷やスレが入り、全体的にうっすらと砂埃が付着している。

柔らかな素材が、使用感と結花の私物感をより濃く伝えてくる。

そして——

中敷。

(……うわ……)

靴の中を覗き込むと、まず目に飛び込んできたのは踵部分の黒ずみ。

元は綺麗なベージュだったであろうインソールに、しっかりと灰色の“結花の足型”が刻印されていた。

(ああ……もうやばい……)

見ただけで股間がガッチガチに硬くなる。

皮脂と汗。

素足の足裏を押し付けられ、それらが積み重なった証が、この靴の中に刻まれている。

(やばい……やばい……やばい……)

震える視線を奥のつま先部分へ移す。
すると、そこにはハーフインソールが差し込まれていた。

それは中敷きよりも淡いクリーム色のクッション性のあるもので、つま先の部分にサイズ調整か、滑り止めのために入れてあるのだろう。

そして、そのハーフインソールには——
“結花の足指の跡”がよりクッキリと黒く刻まれていた。

一本一本の指跡が、リアルに浮かび上がっている。
指先のあたる部分には汚れが集中し、少しめくれた繊維の下には、湿気で変色した跡も見える。

（こんなの……もう我慢できない……）

（これが……結花ちゃんの足が……素足が…

…ずっと踏みつけてた靴の中……)

(エッチすぎる……結花ちゃんが履いてる靴の中が……こんな……)

視界が揺れ、鼓動が爆音に変わる。
靴を見ているだけで、匂いの幻覚すら感じる。

「じゃあ私はここで待ってるね～」

結花はベンチで足を組み直し、片足をぶらぶら揺らしながら可愛く手を振ってくる。

奏太はパンプスを手に、まるで儀式でも行うかのように慎重な足取りで結花の靴跡がたっぷり刻まれた撮影場所へ向かう。

歩く先には、先ほど彼女が実際に踊っていた砂地。

——無数に刻まれたソールの跡。

——その上に、潰れた蟻たちの黒い残骸。

(……ここで、結花ちゃんが……この靴で……)

奏太は立ち尽くす。砂地の上にしゃがみこみ、目の前の地面を見つめる。

そこに残されたのは、現実そのもの。

可愛いパンプスのソール跡。

その中で、惨めに潰れた黒い粒。

そして——今、自分の手の中にある、この靴で、あの足で、この光景が作られた。

手に持ったパンプスに目をやる。

可愛いリボン、丸みのあるトゥ、全体にうっすらとついた砂埃。

履きこまれた中敷にはくっきりと足の形。

踵には黒ずみ、つま先部分には黒い指の跡と蒸れの痕跡。

(……可愛い靴なのに、めちゃくちゃ履き込まれてる……)

震える指先を、パンプスの履き口にゆっくりと添える。

目の前には、ついさっきまで結花の素足が押し込められていた空間。

（もう我慢できない……）

奏太は息を止め、パンプスの履き口をゆっくりと鼻に近づけ、そっと鼻を突っ込んだ。

中には、まだほのかに体温が残っていた。

ほんのりと生暖かい空気——。

結花の足の体温を感じながら、ゆっくりと鼻から息を吸った。

——その瞬間。

「……ッ！！」

鼻腔に走った、強烈な衝撃。

思わず目を見開く。

蒸された合皮のにおい。その直後に漂う、汗と
皮脂が発酵したような、酸っぱく濃厚な臭気。

それは——まぎれもなく、「足の匂いだった」。

想像では追いつかない、圧倒的な現実の“生臭
さ”。

（ッッ！……くさい……！！）

けれど、全く不快ではなかった。

むしろ、脳天を突き抜けるような衝撃と共に、下半身がドクンと跳ね上がる。

ズボンの前が、今にも突き破りそうなほど膨らんだ。

「は……っ、結花ちゃん……！」

あの可愛い顔からは想像できない、汚れた中敷きから香る素足で履きこまれたパンプスの中で蒸れた足の匂い。

酸っぱい発酵した汗のような匂いと、ぽわんと漂うほんのり納豆のような濃い足臭。

（結花ちゃん……可愛い顔して、こんなに……こんなに靴汚して……臭くなるまで履いて…
…）

【この先の展開】

● ついに妄想で何度も果てた憧れの結花の脱ぎたてパンプスの匂いを直接嗅いだ奏太。

可愛い結花に似つかわしくないその濃厚な匂いにズボンを突き破りそうな程股間を膨らませ、結花が踏み散らした蟻達の残骸と地面に残る靴跡を眺めながら靴の中に鼻を擦り付け、快楽で頭がおかしくなりそうになる奏太。

● 靴の匂いを堪能し、結花のもとに戻った後、結花から更なる足や靴にまつわるエピソードを聞かされることになり増々結花の虜になる奏太。

● 後日、アドバイザー兼カメラマンとして結花の裏垢用フェチ動画撮影に同行した奏太は、ふと地面に弱ってもがいているカナブンがいるのを発見する。「これを気づかれないように結花ちゃんの足元に置いたらどうなるんだろう

…」そう思った奏太は、何も知らず踊る結花の足元へ弱ったカナブンを仕掛けることに…。

●何も知らない結花の足で散々弄ばれた挙句のカナブンの末路を目の当たりにし、撮影後の結花の反応にすでに理性を抑えきれないほど興奮する奏太。その後、我慢できず再び結花に靴の匂いを嗅がせてもらえないか懇願するが、それだけにとどまらない結花からの提案と行動にもはや正気を保つのが難しい程興奮させられ、幾度となく絶頂させられることになる奏太…etc

ずっと憧れていた結花の靴についてその手で触れ、見て、嗅いで、さらに奏太の性癖を刺激し続ける結花の行動に今まで抑えていた欲望がもう止まらない…。

目が離せない後半はフェチ描写にこだわったフル挿絵付きの製品版でどうぞ！